

教育界の新時代にアクセスする！



学ぶことが好きになる。

光文書院

V PRESS

for Contemporary Education **ブイプレス**

“活用力”を考える

特集

活用力って何？

特別インタビュー

今なぜ“活用力”か？

——現場の先生が語る“活用力”——

2007
vol.

6



巻頭特集

1 活用力って何?

坪田耕三

[特別インタビュー]

4 「今、なぜ“活用力”か？」

学力調査・活用B問題

分析と指導改善のポイント

10 国語

13 算数

活用問題提案と指導改善のポイント

16 理科

18 社会

新刊紹介

20 算数の活用力を育てる授業

21 国語の活用力を育てる授業

光文書院サイトリニューアル

22 授業準備応援宣言！

応援1“授業のネタ”満載

応援2“生きたアイデア”紹介

応援3旬のコンテンツ充実

活用力って何

筑波大学附属小学校 副校長

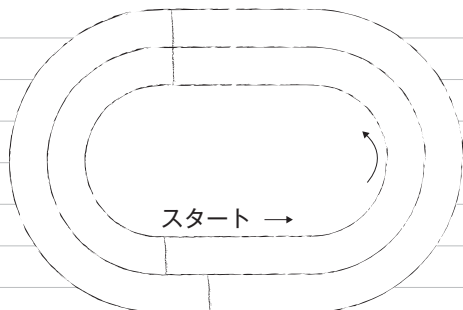
坪田 耕三



例えばこんな問題は

運動場にセパレートトラックを作る。一周の競走をするのにスタートラインを引かなければならない。外側のコースのスタートラインは内側よりも前になる。さてスタートラインはどこに引くか。

ゴール

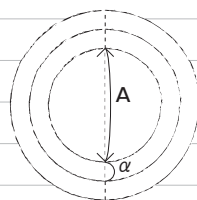


スタート →

こんな具体的な問題にぶつかったらどうするか。いちいち実際に運動場で巻き尺を使って測らなければならないのか。

いや、教室での勉強が役に立つはずだ。円周率の勉強はどうか。

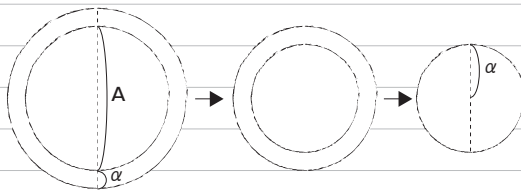
ラインの内側と外側の長さの差を考えればよい。直線コースは距離が同じだから除外だ。すると二つの同心円の内と外の長さの違いでスタートラインが決まることに気付く。



だったら、後は計算。コースの幅を α とすれば、直径 A と直径 $(A + 2\alpha)$ の円周の差だ。

$\pi(A + 2\alpha) - \pi A = \pi(A + 2\alpha - A) = 2\pi\alpha$ となって、これは「幅を半径とする円周」分だけ長いとわかる。

しかし、これは式を変形して納得するものだが、二重の同心円の周の差は下の図のように、徐々に内側の円を小さくしていけば、最終的に幅だけが問題になることが納得できよう。



これは図形感覚かもしれない。数量形感覚を磨くことも大切なことだ。

「活用」という言葉を表面的にとらえれば、持てる知識を日常の生活に効果のあるように利用することととらえるが、知識の利用はそれだけではない。

さらに新たな知識を創り出すときにも使われるのである。

知識はそうして積み上げながら、深く大きな豊かなものになっていくのである。

活用する力

最近急に「活用力」という言葉が学校教育の世界で言われ出した。

国際的な調査によって日本の子どもの力で落ち込んでいるところが「活用力」であるとか、今年になって初めて、国の大きな学力調査が行われ、その中に「活用力」を問う問題が大きな位置を占めたことにもよる。

さらには、次期学習指導要領の改訂のポイントになるキーワードにも「活用力」が入ってきそうな気配もある。こんなことによって、この「活用力」は急激に脚光を浴びる言葉となった。

さて、「活用」という言葉はどのようなイメージを持つ言葉であろうか。

何かの知識や技能が効果のあるように利用されることというほどの意味であろうか。

とすれば、学校で学ぶ教科書の知識が日常に利用されるということがこれにあたるということになる。

このような意味だけが前面に出てくると、学校での勉強が何のためのものかという議論になったとき、それは目に見えたものとして役立たなければならぬということになりがちで、学ぶこと自体の楽しみなどは消え去って、効率的なものだけが大事にされるということになってしまう。

だから、この「活用力」というものをとらえるときにもっと幅の広いとらえ方が必要になってくる。

学校の学びは、その学びそのものの中に沢山の面白さが含まれている。

子どもが学ぶことの価値を見出して、追究活動を始める、そのこと自体が教育の価値なのだととらえたいものである。

戦前の教科書に「緑表紙」の教科書というのがあった。このことについて最近『伝説の算数教科書（緑表紙）塩野直道の考えたこと』（松宮哲夫著／岩波書店）という本が出版された。

この本は「算数は単に計算の習熟のためだけにあるのではなく、数の概念や演算がどのように生まれてくるかを日常生活と結びつけて理解できるように工夫された画期的な内容」であり、当時の教育界に絶賛されたようであった。

しかし、当時、中には内容が難しいと感じる者もいたらしく、それが分析されていた。その理由は、第一に問いの形式。それ以前の教科書（黒表紙）では「いくらか」「どれほどか」などの求答の種類がほとんどだが、緑表紙では「どこが違いますか」「問題をつくってごらんさい」「表からどんなことがわかりますか」など多様な問いで、このことに少なからず戸惑いがあったようである。

これは現代でも同じことで、算数の授業が答えを求めることだけが目的になっていけば、当然考える途中の過程などに価値を置かないことになる。だが、本当は、子どもが考える途中の状況や、その内容から発展的に考えるところを重用視する必要がある。「活用する力」というのは、まさにこのことに通じるものだと考える。

活用する力の分析

では、「活用」について、どんな活動がそれに当たるのかを少し詳細に見ていこう。

わたしは、「深める（発展）」活動・「広げる（応用）」活動・「使える（適用）」活動・「繋げる（関連）」活動・「作れる（創造）」活動・「読める（分析）」活動といったことがこのことにあたると考えたい。

「深める（発展）」活動は、1つの問題を解き終わってそのままにせず、「もしも～だったら」と考えて新たな問題を見出す目を育てる。算数の問題であれば、1つの問題を解決してもそのままにせず、もしも数がもっと大きかったらどうなるかとか、もしも形が複雑になったらどうなるのか等々と考えて一般化していく力を育てていくことになる。

「広げる(応用)」活動は、基本の考えを生かす幅広い応用が考えられる。最も大切な基本の考えをもとに、その筋を生かす問題について考えることが大いに奨励される。問題の本質を考えた応用を考えていくことが最も有効に働く力を育てることになる。

「使える(適用)」活動は、算数の内容を日常生活に生かす学習であり、それによって感動的な出会いがあることが学びを豊かなものにする。活用という言葉からはこの活動が最も身近に感じられるものだが、日常生活への適用に気付く新鮮な驚きが力になるのである。

「繋げる(関連)」活動は、他の教科の内容などを総合的に扱うことを考えるものである。仕組みが同じと見られるものを一緒にしたり、事象や場面が同じものを一緒にしてみたりすると、違ったもの、ばらばらに見えたものが同じものに見える。また、関連性のないものをあえて繋げてみると、全く新しいものが見えてくるときに統合する目、発展させて考える力がついてくる。

「作れる(創造)」活動は、体験的な活動である。実際の体験によって知識は身に付き、忘れがたいものとなる。まさにハンズオンの活動となる。

「読める(分析)」活動は、推測する力や条件を選択したり、不備を補ったりする力が大きく関わってくる。表やグラフなどのデータを読み、条件の過不足を整理し、多様な答えをまとめていく柔軟な考え方を育成する。

学校での授業

子どもはスポンジが水を吸うように知識を吸収する。知的好奇心旺盛な存在なのである。

まだ言葉を自由に操れない赤ん坊でさえ、何かができるようになると全身を動かしてその喜びを表している。音楽に合わせて手を動かし、体を弾ませている姿は、はたから見てもほほえましいものである。

新しいことを知るとか、新しいことができるということは人間が本来的に持っている喜びなのである。

学校での勉強は、そんな知的好奇心旺盛な子どもが集まって、教室という場で、先生の応援を得ながら、

自ら知識を創り出していくところなのである。

国が発展途上にある時代には、教室は知識伝達の場になっていた。先生から講義を受けてそれを一心に憶えるという学習が進められていた。

だから、インプット能力の優れた子どもがよい評価を受けていた。入学試験などでも記憶量の多い子どもがよく評価されていたわけである。

しかし、これからの社会ではそうではない。社会の中で出会う困難な問題を解決していく力が望まれることになる。

何人もの人間の中で上手にコミュニケーションがとれる力が望まれる。

ただ知識の量が多いというだけではこういう場面では使いものにならない。持てる知識を上手に使ったアウトプット能力の長けた人間が必要な時代なのである。

あるいは自ら試行錯誤しながら問題の解決方法を多様に考える力が必要なのである。入学調査もきつと様変わりするに違いない。

現に文部科学省が行った学力調査でも、「活用力」を問う問題がたくさん提示された。

小学6年生と中学3年生の子どもが対象であったが、活用B問題は、ほとんどが子ども自ら説明をする力を問うものだった。解答用紙は説明を書く広いスペースが開けられている。

そこに論理的に考えを書いていくのである。そんな問題だらけであった。ABCなどの解答選択肢を記号で書く解答用紙ではない。当てずっぽうなどは全くできないものである。

問いに対して「なぜ」を説明する力、「もし〜だったら」と発展的に考える力が要求されたのである。こんな力は一夜漬けでは身に付かない。小学校に入った1年生からやって来なければならない力なのである。

これからの教育では、こんな力はどんな力なのかをもっと詳しく分析して、子どもの身に付けるべく努力していかなければならないであろう。

今、なぜ“活用力”か？

【関東地方中心に15人の先生にインタビュー】

“活用力”を考える

“活用力”という言葉が、学校教育の世界に飛び交っています。国際的な学力の調査(2003年PISA調査結果など)において、日本の子どもの力で落ち込んでいるところが“活用力”であるとか、文部科学省が40数年ぶりに行った全国一斉の学力調査に“活用力”を問う問題が大きな位置を占めていたことなどが背景にあります。

しかし、活用力については、これまで評価問題でも取り立てて扱われてきたものではなかったために、活用力を評価する問題がどのようなものであるか、学校現場にも具体的なイメージはありませんでした。また、活用力に焦点を絞った授業について話題とすることも多くはありませんでした。

さて、いったい活用力とはどんな力なのか、なぜ、

学力調査(問題)に対する学校現場の反応は？

今年4月に、文部科学省が全国の小学校6年生・中学校3年生を対象に学力調査を実施しました。今回の調査では従来型のA問題に加えて、“活用Bの問題”として新しい形式の問題が取り上げられました。先生方の学校では、先の学力調査について、どうとらえられたか、どんな反応でしたか。

今、“活用力”なのでしょうか。学力調査の国語と算数の活用B問題を手がかりに、活用力の中身やその伸ばし方について整理を試みました。具体的には、学校現場の第一線で活躍している先生方に、おもしろいようなことをインタビューしてみました。

★実施された学力調査の活用B問題(国語・算数)を子どもや先生はどのように受け止めたか。

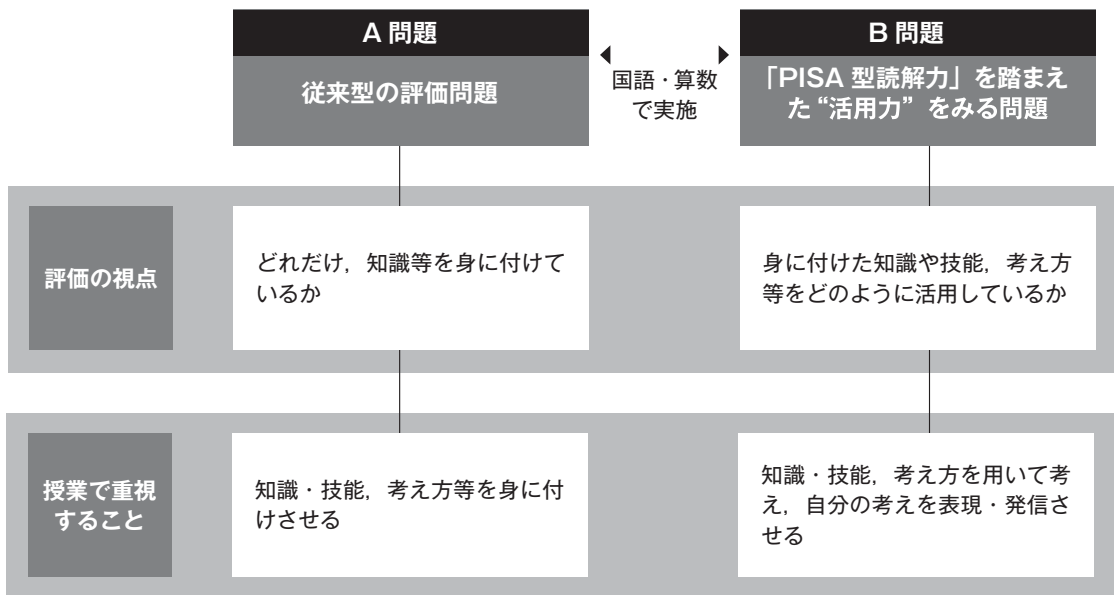
★これらの問題(活用B問題)は、これまでの問題と何がどのように違うのか。

★授業や評価など、学校現場はどのように影響を受けていくのか。

特に、今回は調査対象とならなかった社会科や理科を専門に研究している先生方にもご意見を伺うことで、4教科に共通する授業改善のポイントを浮き彫りにしたいと考えました。

A先生(国語専門)：(活用Bの問題については)子どもたちもびっくりしていましたが、まずは、わたしたち教師がびっくりしました。特に、国語では物語文や説明文などの文章が読解のよりどころでしたが、今回の問題では、ポスターやグラフからの読み取りなど、これまでの国語の読解力とは違う読解の力が必要であったことに驚きました。子どもたちが、問題の文意を把握することが難しい問題も多かったように思い

全国学力調査（H19.4.24: 小学生 6 年 . 中学生 3 年で実施）



評価問題が変わる→授業も変わる

- ①このことを学校現場はどう受けとめているか？
- ② 4 教科の授業をどう変えていけばよいか？

ました。

B先生（算数専門）：算数のB問題に関していちばん驚いたのは、「自分の考えを書きなさい。」という解答形式がたくさんあったことです。これは、自分の考えを書きなさいという授業をしている先生方は良かったでしょうけれど、いつも式と答えだけ書いて終わりという先生方は、面食らったと思います。

C先生（理科専門）：OECD 問題の流れから、ついに来たかという感じでした。少しうがった見方ですが、文部科学省は学力調査を実施して、県別や地区別・学校別の学力の序列を調べてくるのだなと思いました。

D先生（社会専門）：活用Bの問題の第一印象は、丸

暗記ではないということです。考える必要のある問題なので、その子どもの対応する力や、持っている学力がストレートに出てくるのではないかという気がしました。変化の激しい社会で主体的に生きていくのに必要な力というのは、持っている知識を組み合わせたり、比較したり、関連づけたり、想像力を働かせたりするなどして、何らかの判断をしていくことなのではないかと思います。今回の問題を見て、そういうことをあらためて感じたというのが率直な感想です。

F先生（算数専門）：A問題はこれまでと同じタイプの問題で、子どもたちは一生懸命取り組んで、答えを導き出していました。活用Bの問題については、特

に国語ですが、設問に至るまでの文章が長いので、その問題文を読み取るだけで途中で挫折してしまい、設問文までいかなかった子どもがいました。これまでと違った問題形式に直面した子どもたちはまず驚き、その子どもたちの様子にわたしたち教師が驚くということがありました。

G先生（理科専門）：活用Bの問題を見て、今までの単に知識を問うような問題ではなく、いろいろなことを総合的に考えて判断しなくてはならない、いわゆる問題解決的な問題に近いものであったと思いました。最近、新聞を読んでいると、「本当に学力は落ちているのか」という記事が出てきますが、問題解決能力については日本のレベルは高いようです。全体として子どもたちの学力はそれほど落ちていないのではないのかという実態を文部科学省はしっかり見極めようとして、今回の学力調査を実施したのかもしれないと思いました。

授業や評価問題は、どう変わっていくか？

評価問題の形式が変わったことによって、今後の先生方の授業や学校、評価におよぼす影響はありそうでしょうか。

J先生（算数専門）：当然、授業のやり方を変えていかないとこういった問題形式には対応できないので、授業改善の1つのきっかけにはなると思います。

E先生（国語専門）：やはりペースにあるのは本当の確かな基礎であったり基本であったりするんだなということが、反対にとてはつきりしたという見方もできるのではないかと思います。

K先生（理科専門）：基本的には良い傾向にあるのではないかと思います。しかし、能力差や格差が広がっ

てくるのではないのでしょうか。トップクラスの子どもたちにとっては非常に意味のあることなのではないかと思いますが、それ以外の子どもたちにとっては、活用Bの問題はレベルが高くてできない。そういった意味で今後、格差はもっと広がってくるのではないかという懸念はあります。

H先生（社会専門）：学力調査の結果や分析が公表されるときに、文部科学省は、何らかのメッセージを発するのだと思います。そのメッセージ次第で、学校現場への影響が変わってくるのではないかと思います。学力調査がで行われたということは、当然、学校現場もその結果から出てくるメッセージを受け止めていかなくてはならないということですよ。

I先生（国語専門）：評価問題が学校現場を変えていくという典型的な事例になっていくのではないのでしょうか。活用を問われるということは、その基礎・基本となる知識や技能、考え方などを、一層重視する必要があるという認識を新にしました。

授業をどう変えていかなければならないか？

各教科の今までの授業における課題と、変えていかなければならないポイントは、どういったことでしょうか。

M先生（国語専門）：問題を理解すると同時に、自分のスタイルや考えをもって、ある1つの形にして表現できる力、つまりインプットされたことをきちんとアウトプットできるような力を備えていかないと考えます。自分が学習事項をわかったというだけでなく、その学習事項を使って、しっかり何らかの主張をしたり、実際に学習事項を使って良かったとか、これができるようになったんだという実感を持つ

て表現・表出したりするところまでもっていく必要があると思います。

A先生（国語専門）：これまでの国語の授業でも表現力を大事にしていましたが、これからは、今まで以上に読み取ったことを自分で再構成したり、自分の考えをもった表現の仕方を工夫したりすることが必要ではないかと思います。

N先生（算数専門）：これまで算数の授業では、問題を読んでそこから数値を取り出し、式を立てて答えを書いて、あとは練習をしましょうという学習が多く見られました。今回の学力調査では、算数の知識を算数の問題に活用する、他教科に活用する、また日常生活にも活用するといった3タイプの問題が出ていました。それは、教材としてこういった活用が大切だという教師側へのメッセージであると思います。

E先生（国語専門）：教師に覚悟が必要になってくると思います。例えば採点1つとってみても、○×や記号だけでは判断できないこれからの学力をみとっていくことは大変です。そういったときに教師側が面倒だと思ってしまうと、今、子どもたちに身に付けさせたいと思っている力はついていかないのではないかと思います。

F先生（算数専門）：解答形式に「あなたはどうか考えますか。根拠をもって、言葉や図や式を用いて説明しなさい。」というように、式と答えを出して終わりでないという形式が多く見られました。これは、授業改善へのメッセージの1つであると思います。わたしたち教師も自分の問題としてとらえて、今後どういう授業をしていったらよいかを考える1つのきっかけになると思いました。

B先生（算数専門）：「活用」というのは、1つに“教材”だと思います。それはある意味、算数の力を算数

に、他教科に、日常生活にというように、先生の方で作るものでもあると思います。それを子どもたちが解決していく中で、これまでの知識・理解をもとにして、判断したり、思考したり、表現したりするという力を授業の中でつけていくことが大事なんだということを言っているのだと思います。

C先生（理科専門）：知識だけを詰め込むような授業を展開していると、「理科離れ」が進むと思います。理科の面白さというのは、たくさんの知識を持ってそれを人の前で話すことではなくて、考えることの面白さ、その自分の考えを人に伝えることの面白さにあるのだと思います。そして、人の考えを聞いてさらに自分の考えを再構成するといった論理的思考力といったものが面白さだと思います。

K先生（理科専門）：今後、評価問題が○×や記号で答えるものでなく、例えば記述式が増え、「あなたの考えを書きなさい。」というような問題になってきたら、当然、授業もそのように変わっていかざるを得ないと思います。これまでのように多くの問題を出すだけではなく、数を限っても自分の考えをしっかりと描き出せるというような記述問題が出てくるであろうと思います。でもそのためには、理科だけの力ではなくて、





その前提として国語力が必要だと思います。国語力なくしては、本当の理科の力はみられないので、そういったところの関連も考えていかななくてはならないと思います。

L先生（社会専門）：社会科授業の現状として、「何かを調べる段階で知識を習得して終わり。」ということが多いような気がしていますが、その現状を打破する意味でも、活用は授業を変えるキーワードになっていくのではないかと思います。例えば、調べる段階で習得した知識を活用して、社会的なものの見方や考え方を育むということまでいく授業が増えていくのではないかと思います。社会的な見方・考え方が育まれてくると、学習したことを実生活に活かしていける可能性が非常に増えてきます。こういったことが、社会科における“活用”というもののよさなのではないかととらえました。

B先生（算数専門）：やはり、言葉は大切になってきますよね。いろいろなことを説明するには言葉を使うので、当然、国語の力ははずせませんね。ただ、算数だけで言えば、言葉だけでなく図や式があったりするので、それを上手く組み合わせながら、相互に関連さ

せて理解を深めていくことはできると思います。

J先生（算数専門）：広い意味で、それはコミュニケーション力が必要になってくると思います。図や絵に描いてみたりして、1つの考えをいろいろな表現をして、互いに共通理解をしていくことがすごく大事だと思います。どうしてもこれまでのような習得型の授業になると、自分が何を知っているか自分が何をできるかだけを求めていましたが、これからは、みんなと話し合う中で、互いに高めていくということも求められているのではないのでしょうか。

H先生（社会専門）：概念形成や理解に、語彙力がより必要になってくると思います。言葉を使って物事を考えるし、言葉を通して物事を理解するので、思考・表現・理解・処理のどの段階でも適切な言葉を使えるかどうかということが大きいと思います。言葉をたくさん知っていて適切に使える子どもは、たどり着くところの質が高いという実態があります。

「なぜ、今、活用力か？」

なぜ、今、活用力が取り上げられるのだと思われませんか。

J先生（算数専門）：これまで通り、基礎的・基本的な知識や技能も大切なことで、きちんと習得させていかなければならないと思います。ただ、それだけで終わらせないで、せっかく習得したものをいったい何に使うかということが、今問われているのだと思います。まず教師が、「算数はいろいろな所に活用されているのだ。」ということを知ることが必要だと思います。そして子どもたちに、活用を促すため、習得した知識をもとに考える思考力、それをもとに判断する判断力、そして表現し他の人に伝える表現力を身につけさせる

ことが求められているのではないのでしょうか。根拠をもって表現させるといったことを中心に授業を組み直していったら良いのかなと思います。

M先生（国語専門）：国語は、いろいろな教科や生活に直結した教科です。国語で学んだことをいかに国語以外の教科や生活に結びつけ、つなげて使えるかということを見直すことが求められていると思います。

G先生（理科専門）：理科の授業は生活の役に立っていないと言われるますが、理科の授業の中で、理科のものの見方や考え方を学んで、子どもたちに考えさせるようにしてほしいと思います。それが、これからの未来を考えていくことにもつながるのではないでしょう

か。

D先生（社会専門）：求められていることは、問題解決的な学習を一層充実させようということだと思います。このことによって、活用する場面がたくさん出てくると思います。

L先生（社会専門）：社会的なものの見方や考え方をしっかり育むことを意識した授業を行うようにすることだと思います。習得した知識がなければ概念形成ができません。

インタビューを終えて

“なぜ、今、活用力か？”というインタビューの中で、先生方が考えておられる授業改善のポイントは、大きく2つありました。

1つは、インプットしたことを自分の中で再構成してオリジナルな考えをアウトプットしていくという活動を組んだ授業にしていかなければならないだろうということです。言い換えると、身に付けた知識や技能などをもとに思考・判断し、根拠を明らかにして自分の考えを表現していくという流れの授業展開を基本にするということです。特に、発信や表現ということを意識した授業にしていかなければならないだろうということです。

もう1つは、その身につけたことを実生活に結びつけ、活用できるようにしていくということ、それぞれの教科に見据えているということです。

また、印象的であったのは、“活用力”で求め

られている「発信型・表現型」の授業を考えていく上では、国語力がポイントになるということです。「言葉の力」が次期の学習指導要領で強調されていることとも強い関係があるのではないかと思います。子どもたちの語彙をどうやって増やしていくか、また、各教科特有の語彙や用語をしっかりと身に付けさせるということも重要になってきそうです。

いずれにしても、国が新しい形式の評価問題を採用したことにより、これまで「授業改善をしていきましょう。」と言われてきたことよりも、ずっと大きな起爆剤になるのではないかという気もします。今回の学力調査において、実際にどんな分析結果が出るのが楽しみですが、それを受けて授業がどう変わっていくかということについて、続けて注目していきたいと思います。

国語 問題分析と指導改善のポイント

■ 国語ではどのような力をみようとしていたか

活用Bの問題は、4つの問題が出題され、それぞれ2問から3問ずつの設定で構成されています。

1. 話し合いを計画的に進める（交流計画の司会）
2. 新聞の記事を書く（環境問題）
3. 比べて読む（二人の読書感想文）
4. 情報を読み取る（セールのちらし）

これらの評価の観点は次の通りです。

観点 \ 問題番号	1	2	3	4
関心・意欲・態度	○	○	○	
話す力・聞く力	○			
書く力		○		○
読む力		○	○	○
言語に関する知識・理解・技能				○

このように見ていくと、4問中3問で、「読む力」をみ取ろうとしていることがわかります。

■ 「読む力」の多様化

今まで読み取りのねらいとして一般的であった、「文章として書かれたテキストから設問に沿って正しい情報を取り出すこと」と比べると、B問題を解決するために求められる読み取りの力は、多様化していることがわかります。今回の調査では、内容の正確な把握とともに、次のような力が身に付いているかどうかをみる問題が出題されています。

- グラフと文章を関係付けて読む
- 2つの文章を比べて読み、評価する
- 絵や簡潔な文字から、情報を的確にとらえる

これらの問題を正しく把握し、文意に沿って答える

ためには、グラフの読み方や、ちらしやポスターに書かれている用語（「半額」、「○割引き」）を、正しい基礎知識として持っていないと、的確に読むことができないテキストもあります。既習の知識と自分の経験とを結びつけて読み取っていくことが必要になります。

■ 自分の考えを記述すること

国語の問題で記述式がとられていることはめずらしくありません。今までも、文章中から適切な部分を書き抜くことは、内容を正しく理解しているかをみるために市販のテストでも必ず取り入れられてきました。しかし、今回の調査では、「文章中から答えを見つけて書く」という形式ではなく、次のような記述式解答が求められています。

- 情報から必要な事柄を取り出して、短い文に書き換える
- どのような理由で述べられているかを的確に読み取り、要約する
- テキストから読み取ったことを踏まえて、決められた字数で自分の考えを提案する
- 文章を読んで、良さや工夫点を評価し、自分の考えとしてまとめる

今回の学力調査の特徴として、正しい理解とねらいに沿った表現ができるかどうかをみるために、読むことと書くことが一体化した問題が出題されていると言えます。これからの時代に求められる国語力の1つとして、「読み取って書く力」が重視されていることがわかります。

■ この問題でみたい力とは

第4問は、「スーパーマーケットのちらし」という、日常よく見かける広告を資料【非連続型テキスト】として、書いてあることを的確にとらえ、正しく説明することができるかどうかをみる問題です。

4

次は、今村さんの家に配られたお店のちらしです。よく読んで、あとの問いに答えましょう。

スーパーマーケット★まちかど★
営業時間 午前8時～午後8時

お客様感謝セール
5月12日(土)・13日(日)の2日間!!

 110円が 80円	 半額	 20%引き
 150円が 98円	 (お一人様1パック限り) 30%引き 294円	 1個70円が 2個で 100円 <small>(消費税込み)</small>

セール期間中(12日・13日とも)
食パンを100名様にプレゼント

みなさん、おいで  

(2007年4月実施「全国学力・学習状況調査」文部科学省より)

- 一 今村さんは、このお店のちらしの内容を友達に説明しようと思います。その説明として、ふさわしいものを次の1から4までの中から一つ選び、その番号を書きましょう。
 - 1 このお店は、夜九時に行っても買い物をする事ができる。
 - 2 サンドイッチは、ふだんの一つ分の金額で二つ買うことができる。
 - 3 セール期間中、お客様全員が必ず食パンをもらうことができます。
 - 4 お客様感謝セールは、毎週土曜日と日曜日に行われる。
- 二 ちらしの中にある「みなさん、おいで」という表現は、店長の立場でお客様に対して使う表現としてふさわしくありません。ふさわしい表現にするために、「みなさん」の書き出しに続けて、「一文で書き直しましょう。」

従来「読む力」をみる問題では、文章による資料【連続型テキスト】から内容を理解し、その中から必要な情報を取り出すことがほとんどでした。しかし、実際のわたしたちの生活では、文章をテキストとした情報ばかりではありません。ちらしやパンフレット、ポスターなどのように絵や簡潔な言葉、数字などのテキストから、自分の経験と結び付けて、正しく内容を理解し、必要な情報を取り入れなければなりません。

自分の経験や、既習の知識を生かして読み取る、ということが、今後、身に付けさせたい重要な力となってきます。

■ どのように力をつけたいか

今までのテキストには、必ず答えが存在していて、絶対的な信頼性がありました。しかし、このちらしを見た限りでは、サンドイッチが半額だったり、ケーキが20%引きだったりしますが、いくらがいくらになるのか、食パンが100名にプレゼントされるのは、先着なのか抽選なのか、などの疑問がわいてきます。

テキストを読んだり、自分で発信したりするときは、経験や知識と結び付けて、次のような角度から、テキストの信頼性や妥当性について、評価や吟味をしながら検討し、表現することを指導したいものです。

- ① テキストからわかること・わからないことは何か
- ② 何をどのように加えたら、読んだ人がわかるか
- ③ 考えたことをもとに表現する

■ 指導の実際

～情報の補完と再構成を重視した指導事例～

(1) テキストの工夫

必要な情報は何であるかを児童に考えさせるような、表現内容やその方法が不十分なテキストを提示してみます。

ソフトボール大会のお知らせ

6月16日(土) 9時～
ひかり公園運動広場
★集合は時計台の北側
○第一小 対 第五小
○第三小 対 第四小
プレゼントもあります。
みんなきてね!

(2) テキストの分析

不十分なテキストから何がわかり、何がわからないのか分析する力を養います。

T: このポスターを見て、わかることを書き出しましょう。

C: いつ、どこでやるか、集合場所や対戦相手もわかるよ。プレゼントがもらえるんだって。

T: では、ポスターを見てもわからないことは?

C: あ、持ち物は? 雨のときはどうなるのかな?
9時になったらすぐ試合が始まるの? 集合時刻なのかな?

C: 時計台の北ってどこかしら? プレゼントは勝ったチームだけなのかな?

T: 一見、必要なことが書かれていると思って、よく読んでみるとわからないことがいっぱいですね。

C: わからないことを、誰に聞いていいかもわからないな。

テキストを分析することで、上記のようないくつかの疑問が出てきます。

(3) テキストの再構成

ここで、読んだ人がまちがうことなく参加できるようなポスターをつくる活動につなげます。

T: どんなことを書き加えたらよいでしょうか。不足しているところは、自分で設定してみましょう。

ソフトボール大会のお知らせ

6月16日(土)雨天の場合は17日(日)
ひかり公園運動広場
★集合 9時 時計台下の噴水前
★試合開始 午前9時15分
12時に終了予定
★持ち物 グローブ、水筒、タオル、
バット(持っている人)
第1試合 第一小 対 第五小
第2試合 第三小 対 第四小

出場者全員に参加賞があります。

問い合わせ先: ○○○○

このように、生活経験に照らしながらポスターの読み手になって、必要だと判断したことをテキストに再構成させる活動が、「情報を読み取って書く力」の育成に効果的ではないかと考えます。つまり、非連続的なテキストが、自分にとって意味のあるものとなるような活動を工夫することが大切です。

資料から正しく情報を取り入れることのほかに、不足した情報はないかと助言することで、テキストを分析し、吟味する活動が展開されます。学年に応じて、招待状や作り方の説明書などもこのタイプのテキストとして活用することができます。

算数 問題分析と指導改善のポイント

■ 算数ではどのような力をみよとしていたか？

活用 B の問題は 6 題出題されました。

1. 事象の数学的な解釈と表現（花壇）
2. 計算法則を用いた工夫（チョコレート）
3. 情報の選択と解釈（漁業）
4. 情報の分類整理と問題解決（ケーキ）
5. 事象の観察と判断（道路）
6. 数学的表現の解釈と判断（走り高跳び）

この 6 題の評価の観点は次の通りです。

観点 \ 問題番号	1	2	3	4	5	6
関心・意欲・態度						
数学的な考え方	○	○	○	○	○	○
表現・処理	○		○		○	○
知識・理解	○				○	

数学的な考え方を中心にみていることがわかります。さらに詳しく「出題の趣旨」をみてみると、あるキーワードが共通していることに気づきます。

そのキーワードとは「読み取る」です。

1. 式に表したり、式が表している内容を読み取ったりする。
2. 計算の工夫を読み取り、…。
3. グラフから資料の特徴や傾向を読み取る。
4. 買い物の場面で必要な情報を読み取り、…。
5. 地図から必要な情報を読み取り、…。
6. 言葉の式と表を読み取り、…。

■ 何を読み取るか

これらの問題で読み取る内容は大きく分けて 2 つあります。

1 つ目は「必要な情報」です。典型的な問題は第 4 問ですが、この問題には「4 種類のケーキの定価」「2 種類の安売り情報」があります。これらの情報から問

題解決に必要な情報を取り出し、問題解決をしていくタイプです。

2 つ目は「式、グラフ、言葉の式」など算数の学習に必要な表現方法を読むことです。典型的な問題は第 2 問で、この問題はチョコレートを買うという具体的な場面を通して計算の工夫を読み取らせるようになっています。

$$25 \times 12 = 25 \times 4 \times 3$$

という計算の工夫（ 25×4 が 100 になるので暗算でできるよさ）を式と言葉の 2 つの表現方法を通して読み取らせるようになっています。

読み取りをした後は算数の知識や技能を用いて問題を解決し、答えを求めればよいのですが、解答の方法にも特徴があります。

■ 自分の考えを記述する解答形式

着目すべき点は解答の方法として記述式が多いということです。しかも問題の答えだけではなく「そのわけを、言葉や式や図を使って書きましょう」としている問題が 3 問あります。解答類型をみると、数学的な根拠が、言葉、式、図のいずれかあるいはその組み合わせで正しく書かれているものを正答としています。

このことから、自分の考えを適切に表現する力もみよとしていくことがわかります。

2003 年の PISA 調査の問題に「身長（背が伸びる）に関する問題」というのがあり、オランダの 10 歳から 20 歳までの男女の平均身長が 2 本のグラフで表されています。この問題において日本の児童の正答率を見ると、単純にグラフの数値の読み取りは 78.3% でしたが、女子の伸び率が 12 歳以降低下していることがグラフでどのように示されているかを説明する問題では、43.3% で、無答率は 29.3% でした。

この PISA 調査の結果から、日本の今の児童には、自分の考えを表現する力は十分でないことがわかります。

■算数 活用 B 問題の特徴

このように活用 B 問題の特徴は

- ① 必要な情報を読み取る
 - ② 知識・技能を用いて問題を解決する
 - ③ 自分の考えを説明する
- の 3 つにあるといえます。


■実際の問題 — 走り高跳び

(★ア)


体育で走り高跳びの学習をしています。
走り高跳びの記録は、身長と 50 m 走の記録に関係すると言われています。
次の式で計算すると、走り高跳びのめあてとなる高さが何 cm になるかわかります。

走り高跳びのめあてとなる高さ (cm) を求める式

身長 (cm) の半分に 120 を加えて、50 m 走の記録 (秒) の 10 倍をひきます。
(身長 ÷ 2) + 120 - (50 m 走の記録 × 10)



けんた



よしお

けんたさんとよしおさんの身長と 50 m 走の記録は、次のとおりです。

	身長 (cm)	50 m 走の記録 (秒)
けんた	140	8.0
よしお	160	8.0

出題の趣旨は次のように書いてあります。

言葉の式と表を読み取り、次のことができるかどうかをみる。

- ・言葉の式に数値を当てはめて計算し、その結果を比較し判断すること。
- ・式の形に着目して、計算結果の大小を判断すること。

体育の学習に関連して、走り高跳びのめあてとなる高さを求める式が言葉の式で与えられている場面である。

この問題を解決するためには、計算して求めためあてとなる高さを実際の記録とを比較して判断したり、式の形から筋道を立てて考え、自分の考えを数学的に表現したりすることが必要である。

設問 (1) は次の通りです。

(★イ)

(1) けんたさんは、左の式を使って、自分のめあてとなる高さを計算して求めました。

実際に走り高跳びをすると、記録は 115 cm でした。この記録を、けんたさんのめあてとなる高さと比較すると、どのようなことが言えますか。

下の 1 から 3 までの中から正しいものを 1 つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 記録は、めあてとなる高さと同じ。
- 2 記録は、めあてとなる高さを上回っている。
- 3 記録は、めあてとなる高さを下回っている。

この設問では、文中から問題解決に必要な情報を読み取ることから始めます。この設問の場合は「走り高跳びのめあてとなる高さを求める言葉の式」と「けんたさんの身長と 50 m 走の記録」です。

必要な情報がそろったら、言葉の式に記録の数値をあてはめ、知識・技能を用いて計算します。

計算した結果を実際の記録と比較し、めあてより上回っているかどうかを判断して、答えを求めます。


このように、設問 (1) では「必要な情報を読み取る」力と、「知識・技能を用いて問題を解決する」力が必要になります。

続いて設問 (2) です。

(★ウ)

(2) よしおさんも、左の式を使って、自分のめあてとなる高さを計算して求めようとしています。

けんたさんは、けんたさんとよしおさんの身長と 50 m 走の記録を見て、次のように言いました。



よしおさんのめあては、ぼくのめあてよりも高くなるのが、計算しなくてもわかるね。

けんたさんは、なぜ「高くなるのが、計算しなくてもわかる」と言ったのですか。

そのわけを、言葉や式を使って書きましょう。

この設問は、けんたさんが考えた根拠を答えるのですが、そのためには、言葉の式や身長、50 m 走の記録に着目して計算結果の大小を判断する必要があります。

まず、言葉の式に着目し、2 人の 50 m 走の記録が同じことから、身長だけで比較できることに気付くかどうかです。

次に、すでに分かっていることをもとにして「○○だから○○である」と根拠を明らかにしながら説明することができるかどうかをみています。その際、言葉で説明する方法、式に 2 人の数値をあてはめ、式の

形から説明する方法などが考えられます。

このように設問(2)では、自分の考えを根拠をもって表現する力が必要となります。

授業改善のポイント

～条件不足の問題提示が導入する事例～

(1) 問題提示の工夫

算数の問題は必要最小限の情報しか含まれていないことが多いです。

例えば、6年の速さの単元で次のような問題があります。(東京書籍 6 年上)

新幹線のはやて号は 3 時間に 630km 走り、
のぞみ号は 2 時間に 480km 走ります。
どちらが速いでしょうか。

このまま児童に投げかけたならば、時間と距離を用いて問題を解決せよと言っているようなものです。そこで、この問題を次のように投げかけてみます。

はやてとのぞみはどちらが速いでしょう。

この発問の場合、児童の反応は様々です。

C: はやてとのぞみってなあに？

C: 一緒に走ればいい。

友達どうしならば一緒に走ることで速さ比べができます。しかし、新幹線のはやて号とのぞみ号は東北新幹線と東海道・山陽新幹線なので一緒に走ることはできません。このように、はやてとのぞみに関する基本的な事項を理解しつつ、

何がわかれば速さ比べができるでしょう。

と投げかけるのです。ここで初めて、この問題の解決に必要な情報を探そうという態度があらわれてきます。

このように、本時に解決する問題の提示の仕方を少し工夫することで、「必要な情報を読み取る」姿勢を養うことができるのです。

(2) 自力解決の工夫

自力解決の場合では、自分のもっている知識や技能を生かして、問題を解決していきます。先の問題の場合で考えると、

$$\text{はやて } 630 \div 3 = 210 \text{ (km/h)}$$

$$\text{のぞみ } 480 \div 2 = 240 \text{ (km/h)}$$

となり、のぞみが速いという結論になります。

この過程が「知識・技能を用いて問題を解決する」部分にあたります。

しかし、この場では算数 B の問題の特徴③「自分の考えを説明する」を実行するとよいです。

この問題の場合で考えると、

その計算をしたわけを考えましょう。

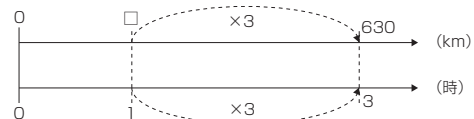
という発問を取り入れることで、自分の考えを説明する機会にすることができるのです。

C: 言葉の式で考えると

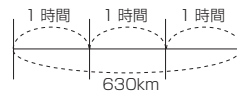
時速＝道のり÷時間です。

となります。しかし、時速が「道のり÷時間」で求められる根拠にはなっていません。

すると、数直線図を用いる考えや線分図を用いる考えが出てきます。



C: 数直線図で考えると $\square \times 3 = 630$ なので \square を求めるには $630 \div 3$ です。



C: 630km を 3 時間で進むので、1 時間あたりを求めるのは $630 \div 3$ になります。

このように、自力解決の時間に、式と答えだけでなく、その計算にしたわけを図や言葉を使って表現させることが大切なのです。

(3) 話し合いの場の工夫

自力解決の場で自分の考えを表現させておけば、話し合いの場では、1 時間あたりの道のりを求めるには、「道のり÷時間」で求められるという根拠が話し合われることとなります。

このように、多様な表現方法で発表させることによって、「自分の考えを表現する」姿勢を養うことができるのです。

発問をほんの少し変えるだけで、授業は大きく変わります。日頃の授業を発問という観点から見直してみると、児童の活動が変化してくるのではないのでしょうか。

理科

活用問題提案と指導改善のポイント

■ 活用の問題と理科との関連

学力調査で、特に注目したいのが PISA 型読解力を意識した「B問題」(活用型の学力)が出題されていることです。「B問題」を特徴的に見ていくと、意図的にいくつかの能力を引き出そうとする問題構成になっていることに気づきます。

- ① いくつかの情報の中から、自分に必要な情報を取捨選択する能力。
- ② 選択された情報を比較したり、関連させたりしながら再構成していく能力。
- ③ 問題解決のプロセスを自分なりの文章に書き表す能力。

などです。今回の学力調査は、国語・算数の2教科でしたが、上記に示した「B問題」の特徴を理科にあてはめて考えてみました。

■ 理科における「活用する力」

理科学習を進める際、次の3項目を意識して学習を進めることは、子どもの能動的思考を促す意味で、とても重要です。

- ① 自然事象への直接体験
- ② 問題解決型の学習方法
- ③ 日常生活との関連

理科学習では、ほとんどの授業で、課題→予想→実験→結果という一連の流れの中で学習を進める「問題解決型の学習方法」をとることが多くなっています。この学習展開の中で使われる能力が、先に挙げた「B問題」の中で使われる能力と類似しています。

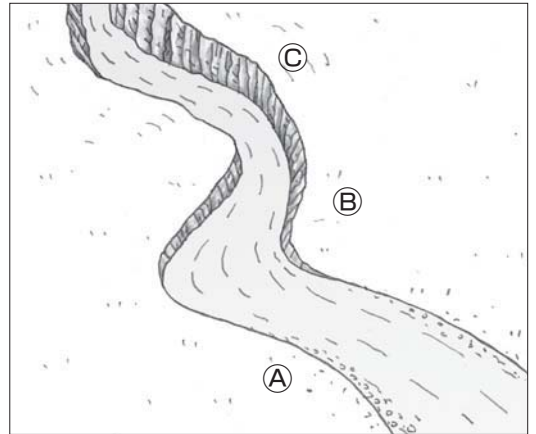
確かに、PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) 2003 年調査結果を見ると、日本の問題解決能力は、韓国、香港、フィンランドの平均得点と統計的に有意差が無いので1位グループといえます。その中でも習熟度レベルの高い生徒の割合が最も多いのは日本であり、OECD の平均値を大きく上回る結果となっています。つまり、日本の理科学習における問題解決型の

学習方法は定着しつつあると見ることはできるのではないのでしょうか。しかし、習熟度レベルの低い生徒が約10%おり、他方では能力格差の広がりがあることもまた事実のようです。

では、理科学習の問題解決プロセスの中に取り入れられている「活用する力」を考えてみたいと思います。

■ 活用問題の事例

第5学年の「流れる水の働き」の単元で、既に身に付けた知識や技能を日常生活へ活用することで理解が深まる事例を紹介します。



もしもあなたが川のすぐそばに家を建てるならば、どこに建てますか。建てる場所を選んで記号で書きましょう。またその理由を説明しましょう。

上記の問題を学習の始めと終わりに行うことで、本単元における学習内容の定着状況をみとることができます。そして同時にこの結果は、理科学習で得た知識・技能が、活きた学習として日常生活の中で活かされているかを問う大切な評価となります。

【学習前の解答例】

A：後ろには平らな川原が広がり、家を建てて生活するのに都合がよい。

B：低い崖の上で、目の前には瀬が広がっていて、
川幅も少し広がっているので景色がよい。

C：高い崖の上で景色がよく、下には速い流れを眺めることができる。

川の学習以前は、豊かな自然環境の中では、景観や便さや使いやすさが、家の場所を決める大きな要因となっています。しかし、この学習後、同じ問題に対する解答の内容は大きく変容します。学習で身に付けた知識・技術・考え方などが活かされていることがわかります。

【学習後の解答例】

A：普段は流れが遅くて川原も平らだけど、雨が降って川の水が増えたら、川原も流されてしまうので家を建てたら大変なことになる。

B：少し高いところにあるので、雨で川の水が増えても被害が少なくてすむので家を建てるのには都合がよい。

C：高い崖の上であってよさそうだけど、川のカーブの外側になっているので、雨が降って川の水に勢いがつくと、崖が削られてしまうかもしれない。

理科学習では、この単元のほかにも第6学年の「地層」や第5学年の「天気」などの学習の中で、情報を取捨選択し、自己の経験や既習事項と照らし合わせながら論理的に自分の考えを創り上げていく問題を工夫できます。

■ 授業改善のポイント

【第5学年】「流れる水の動き」

この単元は、流れる水の動きを通して、増水時の川の様子などに着目させ、大雨、台風による水災害にまで思考を広げることを行なっています。

そこで、単元の導入時には、近くにある川原や河川に行き様子を観察し、「川の流れ」についての課題づくりを行います。

そして子どもたちは、川原にあるさまざまな情報の中から、「川の流れに関する」情報だけを取捨選択し、教室へ持ち帰ります。

T. 川の観察をしてどのようなことに気がきました

か？

C. 川には流れの速いところと遅いところがある。

C. 川には浅いところと深いところがある。

C. カーブの外側と内側とでは、地形が異なっている。

C. カーブの付近は護岸工事がされている。

「この川はどこまで続く～」といった発想をする子どもはほとんどいません。現地の観察を通して、多くの情報の中から、「川の流れ」に関する情報を選択しています。

そして個々が気付いたことや疑問に思ったことを全体で話し合い、一般化して単元の学習課題を整理します。

川の流れの速さは、何によって決まるのだろう。

この課題に対して予想し、自分なりの答えを記述し、全体の前で発表していきます。

C. 流れの速さの違いは地形と関係するのではないかな。

C. 水量の違いによって速さが異なるのではないかな。

など、様々な予想が飛び交う中で、情報の再構成が始まります。これは、**自分の予想に対する裏付け**をしっかりと持つことであり、先の「活用する力」を使っている場面と言えます。

次に、予想に基づいて実験方法を考えるのですが、ここで子どもたちは仮説を持つこととなります。「もし、水量が多ければ、流れる速さは速くなるはず」など、川で得た情報や話し合いで得た情報などを**総合的に判断し、自分なりの裏づけを基に仮説を立てるのです**。当然、次の実験を楽しみにし、取り組みへの意欲も高まります。

実験結果よりも、実験に至るまでのプロセスが問題解決学習の醍醐味であり、子どもの能力開発の根源なのです。

以上のように理科学習においては、すでに「問題解決学習」の過程の中で、「活用する力」が使われていることがわかります。まず、このことを再認識することが大切です。

■ 活用の問題と社会科との関連

学力調査の国語と算数のB問題の設問を見ると、社会の学習についてもあらためて見直す必要があることがわかります。

2教科のB問題はいずれも、これまでのテストとは異なる形式のものが多くありました。また、扱っている内容には、社会の学習内容と関連が強いものもありました。例えば、国語の[2]の問題は、紙・板紙の生産量についての統計資料（非連続テキスト）から必要な情報を読み取り、説明的文章を完成させるものでした。また、ゴミの問題を社会や経済の発展という視点から説明した文章を読んで、「地球わくわく新聞」にまとめるという表現活動も扱われています。資料を活用して得た情報や自分の考えを新聞にまとめるという活動は、社会の学習活動そのものともいえます。

算数の[3]の問題は、漁業に従事する人々についての統計資料の読み取りから、わかることを問うものでした。国語の問題と同様に、漁業という社会の学習内容を扱い、統計資料から読み取ったことをもとに考えを表現する問題でした。

このように、国語と算数の「活用の問題」において、従来から社会で重視してきたはずの資料活用・表現の技能が用いられていたことがわかります。

■ 社会科における「活用する力」

しかし、社会の授業では必ずしも資料活用・表現の力を高める実践が盛んに行われているとは言えません。資料を活用して調べる活動はどの時間にも行われていますが、調べて得た知識を既習の内容や経験と関連させて吟味し、自分の考えとして表現する活動は少ないのが現状です。評価問題についても、考えを記述させる問題は採点に時間がかかり、また、その規準の設定が難しいこともあり、ほとんど扱われてきませんでした。特に、評価問題として扱われないことは、指導でも扱われないという学校現場の実態がありました。

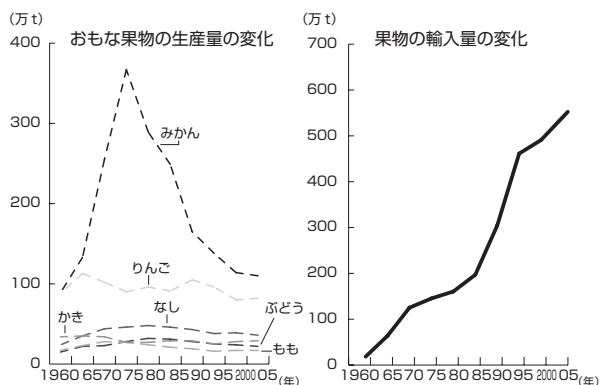
つまり、社会においてもあらためて次の3つのことの大切さを再認識し、実践を工夫していく必要があります。

- 調べる活動を通して、資料から必要な情報を読み取る。
 - 知識・技能を用いて考える。
 - 自分の考えを新聞やレポートにまとめる。
- さらに、

- 個々の考えを交流させて、社会認識を深める。
- ことも念頭に置き、子どもが、社会で学んだことを日常生活や将来の生き方にまで活用していけるようにしたいものです。

■ 活用問題の事例

次の資料を見て、我が国の食料生産について考えましょう。（第5学年の「これからの食料生産」）



あなたは、次のA、Bどちらの意見に賛成ですか。どちらか選びましょう。また、選んだ理由を書きましょう。

このままでは、さらに、我が国の果物の生産が減ってしまうので、輸入を少なくした方がいい。昔の自給率はほぼ100%だったので、輸入を制限した方がいい。国内の農家数は減っているので増やした方がいい。もしも外国で何かあった場合は、輸入ができなくなるから、輸入にたよらない方がいい。

A

今は、日本ではあまりつくられない果物がたくさん売られているからもっとたくさん輸入をした方がよい。外国産の果物は種類も多く安い。それでも、国内の果物は、価格が高くてたくさん売られているから、今のままで問題ない。外国と仲良くするためにも、たくさん外国産の果物を買った方が、喜ばれると思う。



(Aに賛成：Bに賛成) 理由：

■ 授業改善のポイント

○ 問題提示の工夫

すでに身に付けた知識や技能を活用しながら、武家造の考察を深め、自分の考えを表現する活動の事例を紹介します。第6学年の「源頼朝と鎌倉幕府」の導入で、既習の寝殿造とこれから学習する武士が住んでいた武家造とを比較する活動です。

まず、寝殿造の絵を見せて、やしきや貴族のくらしの様子について簡単に振り返ります。続けて武家造の絵を寝殿造の絵の横に貼ります。

A：寝殿造のやしき



B：武家造のやかた



C：寝殿造とはまったく感じが違う。

C：周りを川が流れている。

C：見張り台のようなものがある。

など、子どもは寝殿造との比較を通して、武家造の特徴をつぶやきます。

そこで、2枚目の絵は「武士が住んでいたやかた」であることをおさえ、「絵を比べながら、調査隊になったつもりで武家造のやかたの調査メモを作ろう」と投げかけます。

○ 課題の追究

調査隊員として武家造を見て、発見したことや今後さらに詳しく調査しなければならないことなどを、絵の周りに書き込む作業を進めます。

C：やかたの周りには川がある。敵が入りにくいようにしたものだろう。

C：貴族の時代とはだいぶ様子が違う。戦いが多い時代になったのだろう。

など、絵を部分的に見たり、全体的に見たりして自分の考えを「調査隊員」のメモとして記述していきます。

この過程が、「既習の知識・技能を用いて資料から必要な情報を読み取り」、武家造の特徴について「考え、表現する」に当たります。

○ 発見したことや意見の交流

発見したことを発表し合い、黒板に掲示した大きな絵の中に書き込んでいきます。それを見て、この後、どのようなことを詳しく調べたいかを子ども一人ひとりが書く活動を行います。

「絵の比較→発見したことの記入→発見・意見の交流」という流れを経て、今後の、つまり「武士の世の中」の学習についての自分としての学びの方向や内容、方法のイメージを整理します。このように、調べたことをもとに「自分の意見や思いを表現する」ことを大切に授業にしたいものです。日々行っている授業にほんの少しの工夫を加え、それを積み重ねることが、「活用力」を養うことになるのです。



光文書院
新刊紹介

ワーク
シート
つき

算数の活用力を育てる授業

1年生～6年生の20の実践例

算数の問題について、「答えはいくつですか」「何メートルですか」などという問いにはたやすく答えられる子どもも、「どのように求めましたか」「なぜそのようになりますか」「式の意味を説明しなさい」「問題を作ってみましょう」「他にも答えはありませんか」「図をかいてもらなさい」といった問いには、なかなか答えられない。

これからの日本の教育を考えると、算数授業においては、どのような子どもの力を伸ばしていけばよいかを考える視点がここにある。

ここに示したような問いに答えられる思考力・表現力の優れた子どもに育てていかなければならないことは明らかである。

算数の授業で育てたい力は、筋道立てて説明する力であり、不変のものを見出す目である。そして、1つのことに興味を持ったら、それから発展した追究活動を続けられる子どもにしたい。

こんな子どもを育てていくには授業の改善が必要である。一方的な知識の伝達型授業から脱却して、子どもが自ら発見し、知識を創造する創造型授業を目指さなければならない。

算数科においては、国際的に見て、現在の我が国の子どもには「活用力」が不足していると言われていいる。この力をつけなければならないとの声がしきりである。

つまるところ、この活用力とは、問題を「深める（発展）力」「広げる（応用）力」「使える（適用）力」「繋

筑波大学附属小学校 副校長

坪田 耕三



げる（関連）力」「作れる（創造）力」「読める（分析）力」である。こんな力を育成するには授業の改善が必要なのである。そのための工夫が、教師には必要になってくる。

本書は、このような授業の工夫に応じられるように、沢山の活用力をつける問題例が掲載されている。また、活用力育成の問題と共に、実際の授業にも使えるように解説が加えられている。ぜひとも教室でお試しいただき、子どもの豊かな力を伸ばしてほしいと願うものである。



国語の活用力を育てる授業

7つの問題例と11の実践例

「活用」問題とPISA型「読解力」

今回実施された学力調査は、「主として『知識』に関する問題」と、「主として『活用』に関する問題」の2種類から出されたところに特徴があるが、本書『国語の活用力を育てる授業』は、今回の学力調査の、「主として『活用』に関する問題」について調査分析を行い、国語における「活用力」とは何かを明らかにしようとしたものである。その際、この間の「学力問題」に大きな波紋を投げかけた平成16年12月のOECDのPISA調査の結果と、その結果を踏まえて出された、文部科学省「読解力向上に関する指導資料」（平成17年12月）とを重ね合わせながら検討した。

PISA型「読解力」は、「情報の取り出し」だけでなく、「理解・評価」（解釈・熟考）も含み、さらに、テキストを「読む」だけでなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」をも含んでいる。そして、今回の学力調査における「活用」問題には、そのPISA調査の内容、形式とも大きく類似している問題もみられることから、本書では、国語の「活用力」を、PISA型「読解力」を向上させる7つの指導のねらいと一致させながら、その具体化を図ってみた。

「活用」問題と教育課程の改訂

今回の学力調査は、恐らく、新しい教育課程の改訂に直接結び付くものと思われる。とりわけ、国語における「主として『活用』に関する問題」は、これからの時代に求められる「国語力」の方向を指し

元目黒区立中目黒小学校校長
聖徳大学教授

西村 佐二



示したものとしよう。

なぜなら、平成18年2月13日に出版された中央教育審議会教育課程部会の「審議経過報告」の基本的な考え方における「言葉や体験などの学習や生活の基盤づくりの重視」や、具体的な教育内容の改善の方向における「国語力の育成」に盛り込まれている内容が、今回の学力調査問題作成の基本理念（基本的な枠組み）とほぼ一致しているからである。そのことは、PISA型「読解力」とも大きく関与していることでもある。

そうしたことから、本書の提案とその実践が、これから求められる「国語の『活用力』」＝「国語力」を高めることにつながり、これからの国語教育の充実に幾ばくかでも寄与できればと願っているところである。

光文書院のサイトが



リニューアル!

会員登録
不要

ダウンロード
無料

明日の授業にも使えるお役立ちサイトに大変身。

授業準備応援宣言!



<http://www.kobun.co.jp>

光文書院

検索



応援 1 “授業のネタ”を教科書の単元ごとに集めました!

教科単元別ガイド



全単元をほぼ網羅! フリー素材&リンク集

リンク集

フリー
素材集

単元別

調べ学習

そのまま使えるフリー素材と
調べ学習に便利なリンク集を
1単元ずつにまとめました。

応援 2 現場の先生の“生きたアイデア”を紹介しています!

実践アイデア



教室生まれだから 価値があります。

フリー
素材集

ワークシート

現場発
アイデア

教科別

投稿
受付中

教室で実践されたアイデアを
先生方の投稿により公開中。
ワークシートも無料配布!

応援 3 新鮮な“旬のコンテンツ”が充実しています!

研究会情報 / 特集ページ



特集・企画・ニュース… 最新情報満載です。

フリー
素材集

ワークシート

最新情報

投稿
受付中

学校行事を先取りする特集
ページや全国の最新「研究
会情報」は随時更新中!



応援1

“授業のネタ”を教科書の単元ごとに集めました!

会員登録
不要

ダウンロード
無料

明日使える“授業のネタ”満載。

教科単元別ガイド

主要な教科書のほぼ全ての単元を網羅したフリー素材&リンク集です。

約1000ページにわたる“授業のネタ”は、学年・教科書・単元ごとに整理。「使いやすい」「探しやすい」と好評です。会員登録も不要ですので、お気軽に「教科単元別ガイド」をご利用ください。



単元別だから使いやすい
学年・教科書・単元を選べば
“授業のネタ”が待っています。

厳選&必見のリンク集

授業準備にはもちろん、
調べ学習にも使えます。

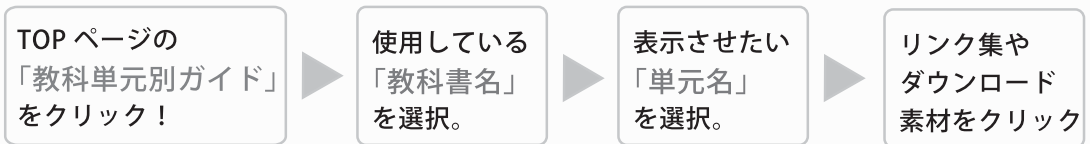
そのまま使える無料素材

プリント作りに最適な素材集
授業準備の際は要チェック。

実践アイデアとも直結!

「実践アイデア」も充実!
授業準備の幅が広がります。

使い方



こんなふうに使っています!



リンク集からフリー素材集まで、いろいろそろっているので、授業の導入の際に資料を子どもに見せたり、自作プリントを作ったりするときにも使っています。



応援2

現場の先生の“生きたアイデア”を紹介します！

光文書院のサイトが
リニューアル!

会員登録
不要

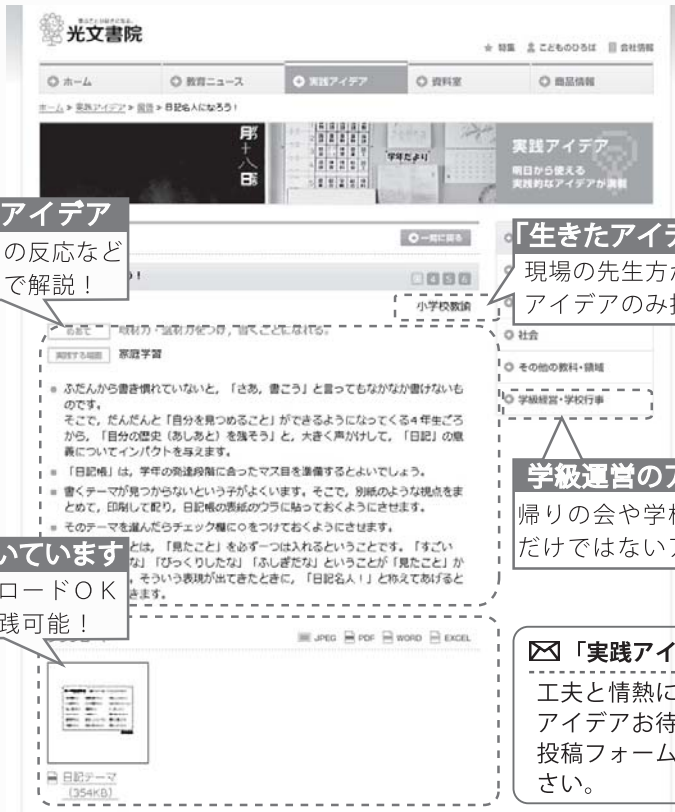
ダウンロード
無料

教室生まれだから価値があります。

実践アイデア

現場の先生方から寄せられた、工夫と情熱にあふれた授業のアイデア集です。

先生ご本人の経験に基づく解説は、まさに実践的。具体的な事例が示されているので、教室の様子が目に浮かんできます。



経験を基にしたアイデア
机の並べ方や子どもの反応など
具体的なポイントまで解説！

「生きたアイデア」は現場から
現場の先生方が授業で実践した
アイデアのみ掲載しています。

ワークシートも付いています
プリントもダウンロードOK
だから、すぐに実践可能！

学級運営のアイデアも掲載
帰りの会や学校行事など、教科
だけではないアイデアも掲載！

☑ **「実践アイデア」随時受付中**
工夫と情熱にあふれた授業の
アイデアお待ちしております。
投稿フォームよりご連絡くだ
さい。

使い方

TOP ページの
「実践アイデア」
をクリック！



気になる
「実践アイデアのタイトル」
をクリック

※教科毎の「一覧をみる」からも
各教科に関連した実践アイデア
をたくさん確認いただけます。

こんなふうに使っています！



いろいろな先生がどんな工夫をしているのかよくわかります。
S先生 ワークシートをダウンロードして自分なりにアレンジして活用しています。



新鮮な“旬のコンテンツ”が充実しています!

会員登録
不要

ダウンロード
無料

特集・企画・ニュース… 最新情報満載です。

研究会情報

「いつどこでどんな研究会が開催されているかわからない。」
研究会情報はそんな声にお応えします。日本全国の研究会情報をデータベース化して掲載。
RSSフィード機能による最新情報の配信も行っています。

必要な情報が見やすく

日時・申込方法・会費など、
必要な情報を見やすい形式で
表示しています。



RSSフィード機能

RSS機能の実装により常に
最新情報が手に入ります。

✉「研究会情報」随時受付中

研究会を開催される際は、投稿
フォームよりご連絡ください。

季節の特集ページ

季節とともに移り変わる学校行事にあわせた、特集ページ。
現在は「秋特集」として、秋を楽しむためのスペシャルコンテンツを公開中です。
今後も、役立つ情報満載の企画を予定しております。



季節に合わせた特集。今後は
「冬休み特集」「新学期特集」
などを予定しています。



調べ学習で使えるリンク集。テ
ーマに合ったウェブサイトを多
数紹介しています。



学校行事には欠かせない、フリ
ーイラスト素材は大好評です。

こんなふうに使ってます!



以前のっていた夏休み特集のときには、読書感想文の書き方や自由研究のやり方
など資料を活用させてもらいました。夏休み前にあわせてすみしましたね。

活用力

を育てる 2冊!

こうぶんエデュ
新刊紹介



B5判 / 112 ページ
定価 1,500円 (本体価格 1,429円)

7つの問題例と11の実践例

国語の活用力を育てる授業

ワークシートつき



編著

西村 佐二

元目黒区立中目黒小学校校長
聖徳大学教授

PROFILE

1944年滋賀県生まれ。

東京都立小学校教諭を経て北区教育委員会指導主事、東京都教育委員会指導主事、同主任指導主事、同初等教育指導課長、目黒区立東山小学校校長、同中目黒小学校校長を歴任。

この間、全国連合小学校長会会長、中央教育審議会臨時委員を務める。

国語における「活用力」とは何か。

40年ぶりに実施された全国学力調査で、「主として「活用」に関する問題」が出され、「活用力」に大きな関心が寄せられています。

本書は、国語における「活用力」を、PISA型「読解力」と重ね合わせ、今後の目指すべき国語科指導の方向を指し示そうとするものです。

1年生～6年生の20の実践例

算数の活用力を育てる授業

ワークシートつき



編著

坪田 耕三

筑波大学附属小学校副校長

PROFILE

1947年東京都生まれ。

第32回読売教育賞受賞。全国算数授業研究会会長、日本数学教育学会常任理事、ハンズオン・マス研究会代表。小学校指導要領解説 算数編作成協力者、教科書「小学 算数」(教育出版)著者。

ただ計算の仕方を教えられ、それを訓練し、答えを導くという力だけを求めても、これからの社会に対応できる子どもは育ちません。算数の学習で求めるのは筋道立てて考える力であり、それを説明できる力です。人と人の間に生きる者には正しいコミュニケーション能力が必要です。今やインプット能力よりもアウトプット能力を求める時代なのです。本書にはそのためのアイデアが満載されています。明日の授業に本書のご活用を。



B5判 / 144 ページ
定価 1,500円
(本体価格 1,429円)

V PRESS 6

2007
vol. 6

フイプレス 第6号

発行 平成 19 年 10 月

著作兼
発行者 長谷川 知彦

発行所 株式会社 光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町 14

TEL03-3262-3271 (代)

URL <http://www.kobun.co.jp/>